

昭和54年度の野菜作付について

(昭和53年の回顧から)

園芸部長 中原忠夫

53年の夏は気象台観測史上はじめてといわれる猛暑にみまわれ、農業面にも大きな影響をうけました。苦心の稲転をあざ笑うような米の大豊作にはじまり、ものによっては豊作貧乏など悲喜こもごもの爪跡をのこしました。それは野菜もごたぶんにもれず、暑さによる病虫害の多発、生育の促進、播種の適期を逸するなど、需給を大きく狂わせ、不安定な青果物の価格のみだれに一層拍車をかける結果となりました。

昭和53年度の野菜の作付は、当初大幅な水田転作による作付増が予想され、生産過剰の危惧が指導者はもちろん、各産地にも見られました。

そのような状況下でスタートした作付の実態はどうであったかという点、第1表のようで、種苗業界の種子の動きから見た予測を参考にしても、

第1表 北海道野菜作付面積

種類	52年度(ha)	53年度(ha)	53年度作付傾向
きゅうり	845	813	+5
トマト	742	706	-5
なす	734	700	-5
ピーマン	152		-3
いちご	652		
すいか	1,360	1,330	-10
メロン	1,050	1,070	+5
かぼちゃ	3,690		±0~+10
スイートコーン		12,000	-3
キャベツ	1,950	1,884	
初夏	375	363	
夏秋	1,570	1,521	+8
はくさい	2,140	2,034	
夏	380	304	-5
秋	1,760	1,730	
ねぎ	740		+7~8
たまねぎ	8,270	8,670	+3
レタス	350		+7~8
ほうれんそう	762	746	±0
だいこん	4,240	4,183	
夏	814	783	+5
秋	3,420	3,400	
にんじん	3,250		
備考	農林水産統計情報事務所発表数字、空欄は未発表		種苗業界の前年対比作付予想

たまねぎを除いてほぼ前年なみの作付と見られます。キャベツ、レタスなど種子の動きが多かった種類も、結果的に暑さのため、作付は伸びなかったものと見られます。

昭和53年度の野菜の市況

昭和52年10月以降、府県では好天が続いて暖冬異変としてさわがれましたが、はくさい、キャベツ、だいこんの生育が進んで、出荷が集中してしまい、秋冬野菜は2年続きの安値となりました。そのため道内でも苦勞して貯蔵した越冬野菜の安値に泣かされました。ところが、府県の生産物が早めに切れたことと、作付意欲の減退もあって、道内の初夏ものの価格は反騰いたしました。さらにだいこんは府県の産地が、集中豪雨による播きなおしをしたことなどもあって、いまだかつてない大根ブームをまきおきました。51年頃より青首大根の早期出荷が注目されていた矢先の高値は、ブームに輪をかける結果となりました。一方初夏出しのキャベツ、はくさいは、作付のセーブに加えて、高温による生育不良、軟腐病の多発による収量減も高値を支えました。

すいか、メロンは好天に恵まれたため、播種期や産地の差を問わず一斉に成熟し、市場に氾濫して、ごく初期を除いてきびしい価格となりました。あまりにも暑すぎるため、すいかやメロンの需要も増えたものと考えられるが、むしろ、アイスクリームとか、飲料水に消費者の嗜好がむけられたきらいがありました。

にんじん、かぼちゃなどの移出用青果は府県の作柄と市況に左右され、はじめはさんたんたるものでした。しかし府県の旱魃によって後半ようやく救われたようです。

昭和 54 年度の野菜作り

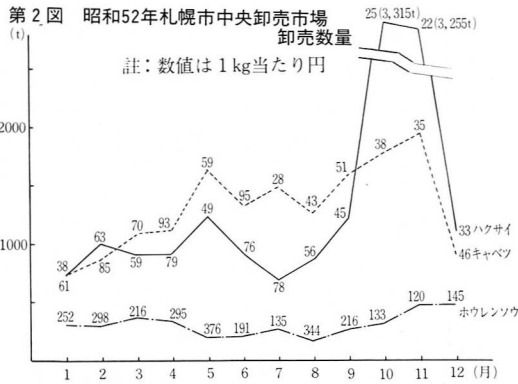
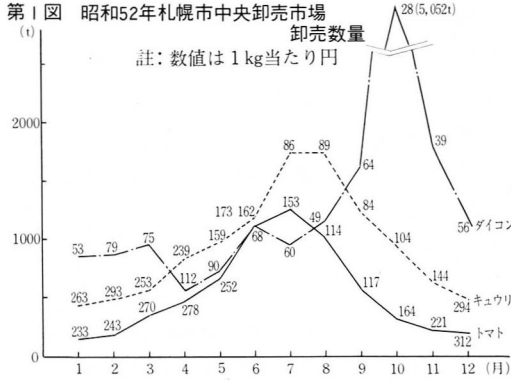
1 作付見こみ

昭和 54 年度の稲転はさらに強化されるものと考えられます。昭和 53 年度の転作面積は全国で 43.9 万 ha(計画の 113%)北海道は計画 88,820 ha に対し 90,411 ha(計画対比 102%)で野菜の作付は少なかつたと見てよいが、本年ははたしてどのような作物が転作にとりあげられるか、その帰趨が問題になります。

野菜はきわめて天候に左右されて豊凶の差はあげしうえに、すでに少し作が良い年であれば、現在の面積でおおよそ需要を充すことができますし、道内だけでなく、全国的な需要と供給の上につながっているといえましょう。昭和 53 年度が一部のものを除いて高値に推移したということから、作付の動きが心配で、今年は、昨年より春以上のきびしい条件下での作付になりそうです。

2 異常気象に対する配慮

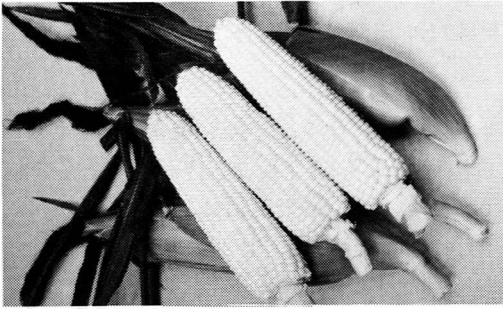
昨年 3 月に発表された長期予報は 7~8 月冷夏のおそれがあるという予報でした。幸いにもあたらずに異常高温の夏を迎えましたが、スイートコー



第 2 表 スイートコーンの生育比較

品 種 名	年 度 (年)	生育日数 (日)	絹 糸 日 後 (日)	草 丈 (cm)	穂 長 (cm)	穂 径 (cm)	平均穂重 (包 付) (g)	上 物 率 (%)	
ゴールデンビューター	52	92	21	155	18.9	4.8	344	65	
	53	81	16	167	19.9	4.4	304	63	
	N K 75	52	96	23	182	20.0	4.6	328	93
		53	85	17	198	20.3	4.2	288	83
ピリカスイート	52	94	21	169	20.0	4.5	312	88	
	53	86	17	179	20.1	4.1	254	90	
アーリースーパースイート	52	99	25	161	21.1	4.7	365	75	
	53	83	15	151	20.7	4.6	333	88	
早 生 種 平 均 前年にくらべ	52	95.2	22.5	167	20.0	4.65	337	80	
		-11.4	- 6.3	+ 6.8	+ 0.2	- 0.33	- 42	+ 1	
ユ コ ン	52	103	26	205	21.3	4.5	374	98	
	53	87	16	193	22.0	4.8	348	88	
メ ロ ゴ ー ル ド	52	96	21	191	19.7	4.7	398	100	
	53	88	16	200	21.1	4.5	345	80	
V T 20	52	108	28	207	22.3	4.6	395	100	
	53	92	18	212	25.1	4.6	302	74	
ゴールデンクロスバンタム	52	108	25	215	20.3	4.5	349	88	
	53	98	21	209	20.9	4.4	300	78	
アーリースーパースイート	52	108	24	190	20.3	5.3	403	78	
	53	98	19	189	19.1	5.3	341	76	
中 晩 生 種 平 均 前年にくらべ	52	104.6	24.8	202	20.8	4.72	384	93	
		-12.0	- 6.8	- 1	+ 0.8	± 0	-57	-14	

註 播種期 52年 5 / 14 53年 5 / 15



スイートコーン

ンは気象予報から、安全を考えて播種間近になり、中晩生種から早生種に移行するという傾向が目立ちました。結果は早生種とか晩生種という区別がなく10日以上も生育が進んで、市場も、加工業界もあわてたばかりでなく、品質の面からも、早生種が多かっただけに消費の停滞となってあらわれました。異常高温にみまわれたということに対して、新聞が揃って、気象予報のむつかしさを強調しながら、気象の変異は地球が寒冷下に向っている証拠だと警告のキャンペーンを行っていることを見のがしてはならない。和田英夫前函館海洋気象台長が昭和49年に発表した日本の気象の長期予測を第3表にあげておきます。

比較めぐまれたここ1両年の天候が平常だと考えてはいけな。作物の種類、品種については不順天候を予測した上で選択し、またそれに対する技術的な研究をおこたってはならないと思いません。野菜も競合がはげしくなると、いやがうえでも、前進栽培に指向しなければなりません。果菜などは天候の影響を受けやすいばかりでなく、前進栽培にしても、当然値上りが予想される石油を少しでも減らしながら進めるという努力が必要となりましょう。

3 野菜の種類別作付の動向

第3表 日本の夏の気象の長期予報 (1974年発表)

1977年	北日本一時低温、全国少雨
78	全国高温、少雨
79	北日本低温、太平洋側多雨、東日本台風
80	全国的不順、多雨、台風日本縦断
81	全国的不順、多雨、北日本冷害、台風上陸北東進
82	変動大きいが平年並み
83	北冷西暑、北日本冷害
84	全国的不順、多雨、台風日本縦断
85	全国的不順、台風日本縦断
86	北日本不順、日本海側多雨、西日本早魃
87	北海道不順、西日本早魃
88	全国高温、早魃

野菜の消費傾向は、食生活の変化、核家族化、主婦のパート勤め、集合住宅の居住者がふえ、漬物をつける家庭が少なくなったことなどから、年々かわってきています。いままでのように、漬物、貯蔵用野菜の需要は多くを期待できなくなってきたこと、つまり周年平均した需要にかわってきているということです。

だいこんは秋出しより、夏出しに関心が移ってきているということを前に書きましたが、播種期はエスカレートするばかりで、トウ立ちの限界期をはるかに超えた早播が試みられ、年によっては全圃場花見をするという危険をおかし乍ら作られております。耐病総太りという優秀な品種の開発によって、多少のトウ立ちなら、ス入りも少なく何とか食用に供せられるということで、市場の人気もよく本年の作付は相当伸びるものと予想されます。

はくさいの初夏出しは、春専用の極早生種を生かす栽培技術が省力化などによって、良質のものが出なくなったことと、秋の品種の無双、春秋の前進栽培ものの品質評価が高いわりに生産の不安定な面もあって、いままで高値を維持してきたが、作付面積の増減が容易な上に、府県の生産に左右されやすい面をもっております。また府県の今冬の価格が昨年に引続いて低迷しており、作付に微妙に影響することも考えられます。

きゅうりについては生食用が多く、種子の少ない品種ということと、冬の半年間、府県の生産物



美国交配ニューサツポロ

に馴らされてきたということで、白イボ系の品種が好まれるようになり、昭和52年、札幌市場の入荷量のうち、白イボ35%、黒イボ55%、その他15%という割合が、昭和53年には、白イボ57%、黒イボ43%に逆転したということです。きゅうりは鮮度が問題にならないため、府県移入物との価格差がきわめて少ないため、早出しは得策でない。露地を除いて、ハウスのローテーションの面から抑制に取り入れられています。抑制の問題点は収量をあげるため出荷を早くすれば露地ものに価格を引っ張られ、おくらすと、収量があがらない点にあります。ハウスでも無加温では10月中旬が限界のため収穫期を延長するためには加温が必要となり、いかに石油を節約しながら加温の効率を高めるかということです。白イボのときわ3号P、黒さんごと、黒イボの長日落合とでは、生育限界の温度Cの差のあることが実験の結果示されていますので、抑制栽培の技術とともに品種の問題はないがしるに出来ません。

トマトは鮮度をもっとも要求されるということから、地物と府県産に30~50%の価格差があり、過積載規制などの輸送コストの高騰は今後、移入物の入荷の減少が予想されるので、ハウスの前進栽培を含め有利性をますものとみられます。

レタス、カリフラワーなどは需要も着実に増え、4月末から出荷が始まり、出荷期間も長くなったが、消費量には限界があり、また府県移出もむづかしいので、市場対策を充分につめた上での計画生産が望ましい。

すいかについて市場関係者の意見を総合すると、品種が何かということよりも、おいしさがまず第一で、産地の売込みが次に大切な要素となります。



松島交配エコー甘藍



トマト旭光

そこで良品質のものの生産さえできれば、量的な消化も問題でなく、高収益も期待できます。

メロンの消費は伸びており、品種の傾向として昭和53年度の出荷量から見ると、赤肉80%、青肉20%の割合となっております。メロン品種の問題点として、いずれの品種にしても、日持ちの短いことで、出荷量が不安定となりやすく、量的な対応もむづかしく、府県へのお荷もこの点から伸びなやんでいます。府県を通じ一番おそい生産地となっておりますが、収穫期が盛夏期とかさなり合うため、優良品種の開発が急がれます。

にんじんは8~9月の府県への供給産地として重要な役わりをはたしてしておりますが、年により、出荷初期か後期に府県産地との競合が目立つようになりましたので、極端な早出し一辺倒より、株数をふやしてLMクラスによる多収をねらった、長期の計画出荷型の栽培に軍配があたりそうです。

スイートコーンについては消費者が、いままで味わってきたもぎたてのクロスバンタムから決してはなれたわけではないが、早朝の収穫作業が敬遠されてきていることと、交通渋滞と、市場のセリ時間の関係などから、ほとんど前日もぎになってしまったということです。いかにクロスバンタムとはいえ、消費者も前日もぎにはついてきえず、残念乍ら、だんだんと、スーパースイート、ハニーバンタム系に嗜好が移行しているということです。品質のよい真白なスノークインは、クセのないおいしさで、日持ちもよく、もっと市場、

消費者に普及したい品種です。

えだまめ、いままで府県などから見ると道内の消費量は少なかったが、最近はのびております。あちこちでサッポロミドリ、ユキムスメなどが本格的に生産されてまいりました。

4 消費者の消費指向

野菜を作る上において消費動向をつかまえるということも大切です。農林水産省の生鮮食料品消費者購買調査によると、消費者は野菜を購入するさい店頭で第1に鮮度50%、第2に色つや18%、第3に大きさ10%などの点から選ぶということで、鮮度つまり品質に重点のおかれていることがわかります。しかし最近生産者も消費者もみかけの姿にのみ重点をおいていないだろうか。また味についても、単にスツパクない、甘いとかいうことにとらわれ、本来の種類のもつ風味、栄養的な要

第4表 露地とハウス野菜のビタミンC比較

(農林水産省食品総合研究所)

品 種 名	月	100g当たり	%
トマト 露地	(7月)	21 mg	100
ハウス	(1月)	15	70
きゅうり 露地	(7月)	22	100
ハウス	(1月)	9	40
レタス 露地	(7月)	8	100
ハウス	(1月)	4	50

素を忘れていないだろうか。ハウスと露地もののビタミンを比較した第4表によると、露地ものの優ることがはっきりしております。畑でもいで喰べるトマトの味わい、朝もぎのクロスパンタムの味は格別です。生産者はこれらの味や、栄養価の富んだものを消費者に提供する努力をおこたってはなりません。このことが需要の喚起につながる重要な問題といえましょう。

5 良質野菜生産の道

良質多収、しかもいろんな種類の輪作を行うためには地力がものをいいます。地力とは堆肥の多施によって得られますが、最近必要量の確保はむづかしくなりました。栽培技術、施肥技術によってカバーしても限度があり、病害虫の多発、品質収量の低下になやむ産地も見うけられます。地力を維持増進する方法としての緑作はこれからの野菜農家にとって大切な技術となります。緑作の方法としては1年間の休閑、作付の間、もしくは前後作に牧草、デントコーン、ソルゴーを作付して鋤込みます。(第5表)

第5表 緑作の例 中央研究農場 上原 (50年)

作 型	作 物	播種	鋤入日数	生草量kg/10a
たまねぎ苗床	マンモスイタリアンB	5/29	74日	2,910
	アカクローバ	〃	74日	2,175
休 閑	デントコーン	5/下	110日	8,000
たまねぎ畦間	マンモスイタリアンB	8/20	62日	4,529
				地上部 3,564
				地下部 2,414

第6表 ハウスの夏季緑作栽培成績

S.48 福井農試 (牧草と園芸26の11木村氏)

種 類	a 当たり生草 収量 (kg)	a 当たり乾物 収量 (kg)	電気伝導度 (ミリモー)
裸 地	—	—	1.42
デントコーン	283	26.6	0.22
ニューソルゴー	510	60.7	0.19
グリーンソルゴー	480	54.2	0.27

播種 7/2 刈取り 8/2

ハウス内では往々にして濃度障害をおこすことがあり、余分な塩類や、残存肥料の除去に緑作は顕著な効果を示します。ハウス経営で休閑区設定するには工夫を要しますが、ソルゴーを夏季60日栽培して、電気伝導度(EC)を15cmの耕土で半分以下、30cmの耕上で3分の1に下げたという報告があり、それを鋤込むことによって有機物の補給効果も充分期待できます。

第7表 54年度推奨品種

種 類	作 型	推 奨 品 種
キ ャ ベ ツ	周 年	極早生 アラスカ、晩生 札幌大球
	エコー、YR錦秋	
ほうれんそう	早春、秋	ニューサッポロ、バイオニア
	夏 播	ニューキング、サンシャイン
ト マ ト	ハ ウ ス	ひかり福寿、強力旭光
	露 地	米寿、いしかり
き ゆ う り		長日落合、黒さんご、ときわ光3号P
		縞王、新三笠
メ ロ ン	マクワ型	プリンス
	ネット型	夕張メロン
か ぼ ち ゃ		黒錦、えびす、みやこ
		レッドコアチャンテネー
に ん じ ん		ニューレッドコアチャンテネー
だ い こん	早 春 播	時無大根、春蒔みの早生
	夏 播	長岡耐病総太り
え だ ま め		サッポロミドリ、ユキムスメ
さ い と う	手 な し	ブルーレク 274、本金時
	手 あり	青菜尺五寸
スイートコーン		アーリースーパースイート、スーパースイート スノークイン、ゴールドクロスパンタム